

失敗から何をどう学ぶか (3)

禍(わざわい)を転じて福としよう



松田宏コンサルティング株式会社
代表取締役 松田 宏

はじめに

これまでの2回では、失敗は同じように繰り返される傾向があるので多くは予測や予防が可能なこと、それでも避けられない失敗は前もって上手に経験しておけば被害を小さくできることなどを述べてきた。

今回は、長い目で見れば失敗は必ずしもマイナスにならず、ときにはかえって良い結果をもたらすことがあるということがテーマである。抽象的な説明だけではつまらないので、楽しみながら具体的なイメージをもっていただけるよう、「論より証拠」のエピソードを交えながら進めさせていただく。

<目次>

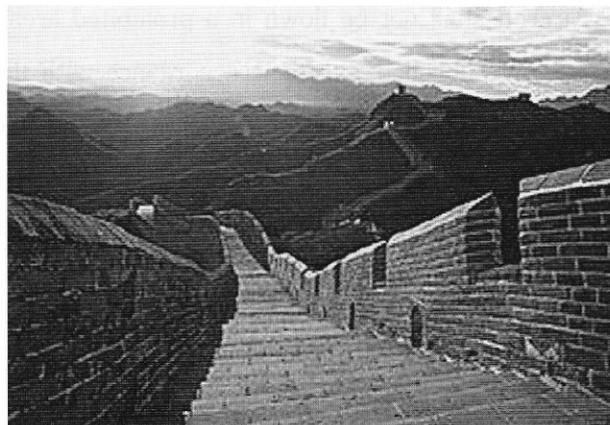
- ▶ 人間万事塞翁が馬
- ▶ 不沈豪華客船のまさかの沈没
- ▶ 機密文書のまさかの復元業
- ▶ 実験の失敗から生まれたノーベル賞
- ▶ メモリで負けCPUで勝ったインテル
- ▶ 爆発事故を踏まえて安全管理を改善
- ▶ 軍用輸送機で負け民間旅客機で成功
- ▶ 接着力不足を逆手に取りポストイットに
- ▶ どんどん失敗してどんどん成長する

人間万事塞翁が馬

中国の故事に「塞翁馬(さいおうがうま)」という、幸福と不幸に関する含蓄の深い物語がある。「塞翁」とは北方の砦・塞(とりで)に住む老人(翁)のことで、出典は中国前漢時代の思想書『淮南子(えなんじ)』の「人間訓」である。

国境の塞(砦)の近くの村に、占いができる老人が住んでいた。あるとき飼っていた馬が国境の向こう側に逃げてしまったので、村人が慰めに来てくれた。しかしその老人は「これが幸福にならないとも限らないよ」と言った。

しばらく経って逃げた馬がたくさんのお馬を引連れて戻ってきたので、老人の家は裕福になった。村人はお祝いの言葉をかけてくれたが、老人は「これが不幸にならないとも限らないよ」と言った。



万里の長城 (写真: Wikipedia)

その後しばらくして、老人の息子が乗馬の練習中に落馬して足を骨折し、ひどい後遺症が残ってしまった。村人が見舞いに来てくれたが、老人は「これが幸福になるかもしれないよ」と言った。

1年ほど経ったとき、国境の向こうから塞めがけて敵が攻めてきたので村中の壮健な者はすべて動員され、弓矢をもって戦った。大変な激戦となり10人中9人が戦死してしまったが、老人の息子は体が不自由だったので動員されず無事だった。

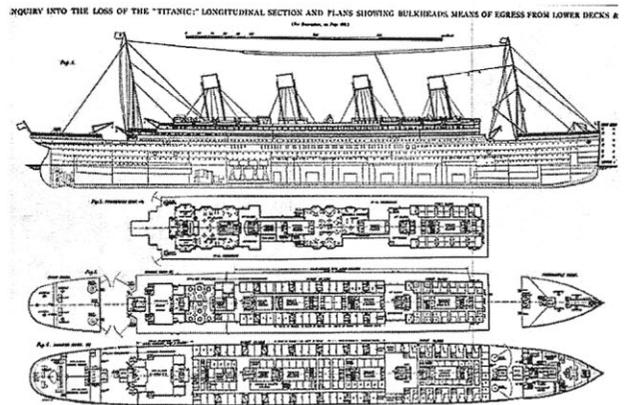
こうしたことを見ると、幸福が不幸の元になり、不幸が幸福につながることもある。人生の幸福と不幸の因果は奥が深く、予測できないものだ。

不沈豪華客船のまさかの沈没

過去の経験から将来起こりうる状況を想定し、それに対応する方策を考えるのが失敗を回避する最善の方法だ。しかし、あらゆる事態を想定し、万全を期したつもりでも考えが及ばないことがある。後から考えればなぜこんな単純なことに気がつかなかったのかと不思議に思うが、そのときはこれで完璧だと自信を持ってしまいがちである。

そこで思い出すが、1912年4月14日の深夜に北大西洋を航行中に氷山に接触し、翌日未明に沈没して1500人以上の犠牲者を出した豪華客船タイタニック号のことだ。この船は当時としては安全対策に力が入られて船底が二重底になっており、船体は喫水線の上までの高さのある防水隔壁で16の区画に区分されていた。設計者は船体の一部が損傷し、2区画(船首部分は4区画)が浸水しても沈没しないはずと太鼓判を押していた。

しかし、タイタニック号はイギリスのサザンプトン港からニューヨークに向う初航海で、霧の中から



タイタニック号の設計図 (写真: Wikipedia)

現れた流氷に接触し、右舷船首に90mにわたる断続的な長い損傷を受けて6区画が浸水した。設計時の想定を大幅に超える大きな損傷だ。しかも、浸水は防水隔壁の上部を超えたため次々と他の区画に拡大していき、不沈船の神話はもろくも崩れ去った。

タイタニック号は当日朝から、流氷群に関する無線電信による警告を少なくとも6通は受け取っていた。しかし、氷山はこの時期の北大西洋ではよくあることと見做され、航海士に伝達されなかった。また、衝突の40分前には付近を航行中の船から警告があったが、無視されてしまった。通信士達が前日の無線機故障で溜まっていた旅客達の電報の発信に忙しかったからである。豪華客船で大西洋を航行中、高い料金を払って友人や知人に電報を打つのがセレブな乗客達のプライドをくすぐったのだろう。

搭載していた救命ボートの定員が乗員乗客の数よりも大幅に少なかったことも犠牲者を増やした。当時は大型船が急速に沈むことはなく、救命ボートというのは救助船との間を往復するものだと考えられていたため、規則がそうなのである。

そのうえ、乗組員が操作や避難手順を知らなかったため、誰も乗せないうちに海面に下してしまったり、定員一杯の乗客を乗せないまま船を離れてしま

った救命ボートも少なくなかった。その結果、多数の乗客が取り残されて犠牲になってしまったのである。

この事故が世界中に衝撃を与えたことは、わが国の児童文学にも出現していることでわかる。「雨ニモ負ケズ」の詩で知られる宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」に、びっしょり濡れた12歳くらいの女の子と6歳くらいの弟、そしてその家庭教師の青年が登場する。どうしたのと聞いてみると、乗っていた船が氷山に衝突して沈み、気がつくと銀河鉄道に乗っていたと回想する場面がある。タイタニック号沈没事故で亡くなった人達というのである。

後から考えれば、なぜこんなことが起きたのか、他にやり方があったはずだと思うことは少なくない。だが、航海史に残る大海難事故はこうして起き、多数の人命が失われた。その後、隔壁の設計は改良され、救命ボートの定員に関する規則も改正された。ボートそのものや懸架装置も改良され、流水情報の伝達や救難通信の方式も改善された。残念ながらその後も海難事故は無くならないが、タイタニック号の経験は様々な面で今に生かされ、隠れたところで多くの人命を救っているのである。

機密文書のまさかの復元

「想定外というのは不勉強と怠惰の言い訳だ」という耳に痛い言葉は、1970年に出版された小説家吉村昭氏の中編ルポルタージュ「海の壁 三陸沿岸大津波 (1984年に『三陸海岸大津波』と改題して再刊行)」に出てくるものだ。過去に繰り返している津波を予想していなかったというのは、予想できなかったのではなく歴史をよく勉強していなかったからか、あるいは何が起こり得るかをよく考

えなかった怠惰の結果だ、というのである。

しかし、まさかこんなことが起こるとは想像できなかった、ということが起きるのが現実の世の中だ。読者のみなさんは次のような事が起こると想像できただろうか。情報・通信技術 (Information and Communication Technology: ICT) の側面から情報セキュリティについて多少は見識があると自負していた私でも、あっと驚いた機密文書の復元作業の話である (出典: ロネン・バーグマン著、河合洋一郎訳、佐藤優監訳、「シークレット・ウォーズ イラン vs. モサド・CIA の30年戦争」並木書房)。

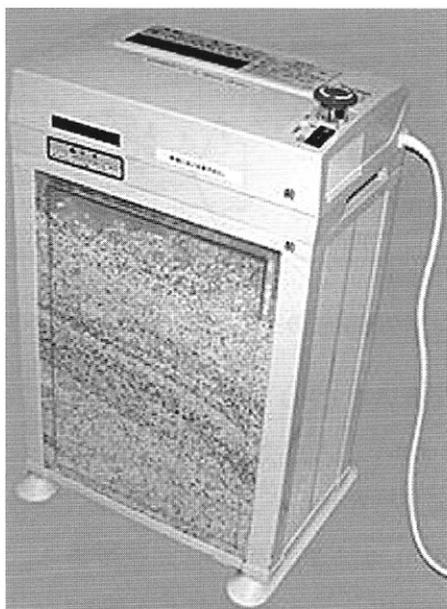
1979年2月にイランでイスラム革命が起き、西欧化政策を展開していたパーレビ元国王は亡命した。その後、元国王がアメリカに入国したことにイスラム法学生らが反発し、11月4日にテヘランのアメリカ大使館を占拠した。そして、アメリカ人外交官や警備の海兵隊員とその家族、計52人を人質にした。イラン・アメリカ大使館人質事件である。

このときは米軍による救出作戦が失敗するなど、さまざまな出来事があったわけだが、意外なのは大使館にあった大量の外交機密文書のことである。アメリカ大使館では占拠が避けられないと判断した時点で、重要な外交文書などをシュレッダーで処分した。燃え残りが出る可能性のある焼却よりも確実だったと考えたのかもしれないし、焼却作業ができる状況ではなかったのかもしれない。とにかく機密文書管理のプロが最適と考え、あらかじめ想定しておいた処分方法だったことは間違いない。

しかし世の中には常人が思いもよらない解決策を考える賢い人がいるものである。イスラム革命軍は英語が読める女子大生を300人も動員し、1年以上かけてシュレッダーで細かく裁断された機密文書の

大部分を再現したのである。外交を担当する国務省の文書管理スタッフも、まさかそんなことが行われるとは想定していなかったのだろう。

だから、現在のプロ仕様のシュレッダーは文書を細長い紙片に切断するストレートカット方式ではなく、米粒のような小さな紙片に裁断するスパイラルカット方式になっている。文書1頁が100枚の細長い紙片に裁断されたものを並べ替え、内容を読めるようにするのは気の遠くなるような大変な作業だ。数頁～数十頁の文書なら、さらに大変だろう。それが約1300の米粒サイズの紙片になると、並べるにしても組合せの数は天文学的なものになり、人海戦術でも文書を復元するのはほぼ不可能である。スーパーコンピューターなら可能性はあるかもしれないが、私は所要時間を計算してみる気にもなれない。



スパイラルカットのシュレッダー
(写真: Wikipedia)

実験の失敗から生まれたノーベル賞

最初の抗生物質として第二次世界大戦中に多くの負傷兵や戦傷者を感染症から救ったペニシリン (Penicillin) は、1929年にイギリスの細菌学

者、アレクサンダー・フレミング (Sir Alexander Fleming) によって発見された。医療用として実用化されるまでにはその後10年以上の歳月を要したが、1980年代に新世代の抗生物質にその座を譲るまで医療現場で重要な役割を果たし続けた。この事例は「20世紀における偉大な発見」の中でも特に重要なものと位置付けられている。

ペニシリンの発見は、細菌の培養実験中の失敗から生まれたのだ。フレミングがブドウ球菌の培養実験をしていた際、汚染によりアオカビ (学名は *Penicillium notatum*、現在は *P. chrysogenum*) が入り込んでコロニーができてしまった。ところがアオカビのコロニーの周囲ではブドウ球菌の生育が阻止されていたのである。彼はアオカビだけを液体培養して、その濾液にブドウ球菌の生育を阻止する効果があることを確かめた。彼自身はその成分を分離することはできなかったが、その物質にアオカビの学名にちなみ「ペニシリン」と命名したのである。

1940年になってH.W. フローリー (Howard Walter Florey) とE.B. チェイン (Ernst Boris Chain) がペニシリンの単離に成功し、翌1941年には臨床実験で抗菌剤としての効果を確認した。その後は効率よくペニシリンを作る菌の探求、菌の培養方法、ペニシリンの抽出方法などの研究が進められ、大量生産が可能となった。当初は軍用に限定されていたが、終戦後の1945年からは民間にも開放され、感染症の臨床治療を一変させた。フレミングとフローリーとチェインの3人には、その功績により1945年のノーベル医学・生理学賞が授与された。

日本では、1943年にドイツの医学雑誌からペニシリンの存在を知った陸軍軍医学校で開発が試みら

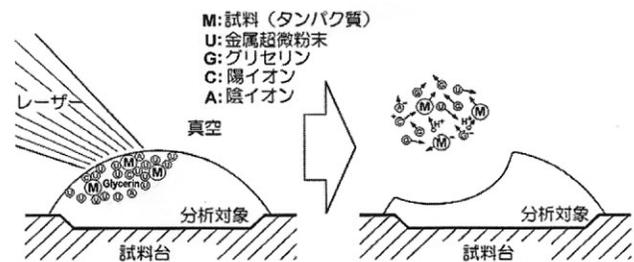
れ、1944年に少量の生産に成功した。臨床的な効果も確認されたが、終戦まで大量生産には至らなかった。終戦後は占領軍の指導のもとで日本の製薬会社が生産を始め、1947年から病院を通して日本中に普及して多くの人命を救った。また、その後の抗生物質の開発の基盤が形成された。

フレミングによるペニシリンの発見は、培養実験中に細菌やカビの孢子による汚染（コンタミネーション：contamination）という失敗によって起きた偶然によるものである。培養や醸造では汚染を起こさないように細心の注意が払われるが、プロ中のプロである学者でも、まれにこうした失敗をすることがある。醸造業の場合は、雑菌が入り込んで繁殖してしまうと、仕込んだ材料と手間暇が全て無駄になり、大損害となる。そして汚染が起きたら、大抵の場合、その材料や試料は役に立たないので廃棄され、最初からやり直される。

フレミングが実験目的には無関係な失敗の状況を克明に観察して原因がアオカビだと突き止め、それがブドウ球菌の生育を阻害する性質があることに気がついたのはさすがプロの細菌学者である。また、発見だけでは臨床医療に有効な薬品にはならないので、それを実用化できるまで長い歳月をかけて研究した学者達も立派なものだ。ペニシリンの発見は、失敗を活かして有用なものに転じた典型的な事例として有名である。

似たような事例が日本にもある。2002年にノーベル化学賞を受賞した田中耕一氏である。島津製作所という計測機器メーカーに勤務する技術者で、受賞理由はタンパク質の質量分析器の発明である。質量分析を行うにはレーザー光線で試料を気化させイオン化する必要があるが、タンパク質は分子量が大

きいため気化しにくく、高エネルギーをかけると気化する前に分解してしまう。ノーベル賞受賞のきっかけとなった発明は、タンパク質の気化実験中に間違っ て試料をダメにしてしまったが、捨ててしまうのがもったいないと思い分析器にかけてみたことから生まれた。それまで考えてもいなかった、実験の目的から見れば間違っ て作ってしまった混合物が、試料の熱エネルギー緩衝材として有効だったのだ。ご本人は「私は貧乏症なので、せっかくの試料をそのまま捨ててしまうのがもったいないと思い、ダメモトで試してみただけです」と語っている。これも実験中の失敗から偶然に生まれた発明だが、医療分野などにおけるタンパク質の研究において重要な役割を果たしている。転んでもタダで起きてはいけない、ということがよくわかる事例だ。



タンパク質試料のイオン化 (図：島津製作所)

メモリで負けてCPUで勝ったインテル

「インテル、入ってる (Intel Inside)」という日本発の標語で有名なインテル社 (Intel Corporation) は、アメリカの半導体メーカーである。社名は Integrated Electronics (集積されたエレクトロニクス) から来ている。その名前のとおり超大規模集積回路 (Very Large Scale Integration :VLSI) 技術によるマイクロプロセッサ、チップセット、フラッシュメモリなどを製造・販売しており、特にプロセッサ (Central Processing Unit: CPU) の分野では

全世界の80%のシェアを占めている。

しかしインテルの歴史を調べてみると、1968年の設立以来ずっと順風満帆だった訳ではない。創業当初は抜群の技術競争力を誇り、稼ぎ頭でもあったEP-ROMやDRAMなどの半導体メモリ事業の業績が悪化し、将来が危惧された時期があったのである。後発で追いつけてきた日本製品の高品質と低価格に対抗できなくなったためである。そんな中、1971年に日本の電卓メーカーから世界初のマイクロプロセッサ(4004:4ビット)の注文があり、その実績を踏まえて将来性の暗いメモリ事業に見切りをつけ、付加価値の高いCPU主体に業態を転換したことが現在の隆盛につながったのである。

その後も8ビットから16ビットのCPUを次々に開発して成長を続け、成長するパソコン市場で大きな占有率を確保し続けた。1981年にはIBM社が同社初のパソコンのCPUにインテル製の8088を採用し、その後の更なる急成長のきっかけになった。今は64ビットのCPUが中心だが、技術優位性を維持し、高い市場占有率と高収益を実現している。

インテルのその後の発展や現在の隆盛は皆様もよくご存知だと思うし、本題から外れるので省略する。しかし、かつてはインテルの本業だったメモリ事業は日本企業に追いつかれ追い越された。そしてその後、日本企業は更に後発の韓国や台湾、中国との価格競争に負けて衰退して経営再建中である。メモリの製造は決して易しいものではないが、構造的には同じものが沢山並んでいるだけの単純なものなので、製造技術が確立してしまえば、後はコストの競争になってしまう。しかしCPUは演算や制御が中心の頭脳部分なので、構造が複雑で付加価値が高

い。そのためライセンスによって同じものを作ることはできても、新製品開発で後発メーカーが追いつき追い越すのは非常に難しいのである。

インテルは、常に最先端の技術で競争力を維持し、高い市場占有率による高収益を上げ、それを次の新製品の開発費に充てるという戦略で、他社の追随を許さない。それも、かつて日本製の半導体メモリに負けて窮地に立つという経営的な失敗を活かし、新天地を開拓した結果である。あの時思い切った決断をせずメモリ事業にしがみついていたら、その後の日本メーカーのように長期的なジリ貧に陥っていたのかもしれない。

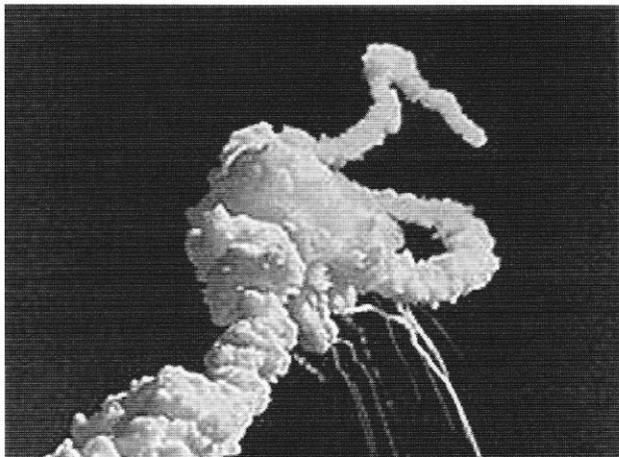


インテルのCPU i7 (写真: Wikipedia)

爆発事故を踏まえて安全管理を改善

アメリカ航空宇宙局(NASA)の歴史では失敗談にこと欠かない。宇宙という、それまで人類が経験したことがない未知の領域にチャレンジするのだから、ある程度の失敗はやむを得なかったともいえる。だから危険なミッションを完遂した初期の宇宙飛行士は英雄視されたのも当然である。事故で尊い命を失った宇宙飛行士がたくさんいたからである。

1986年1月28日に打上げられたNASAのスペースシャトル、チャレンジャー号は打上直後に空中分解し、7名の乗組員が犠牲になった。原因は固体燃料補助ロケットのOリングの破損で、ロケットエンジンの燃焼ガスが噴き出して隣接の接続部分と外部燃料タンクを破壊し、機体が分解してしまったのである。ところが、NASAの幹部は1977年段階でOリングの低温時の弾力性に致命的欠陥があることを知りながらその重大さを理解できず、適切な対処をしていなかった。また、当日朝の異常低温が打ち上げに及ぼす危険性について、担当技術者が警告したにもかかわらず無視し、上層部に報告さえしていなかったのである。



チャレンジャー号の爆発事故
(写真：Wikipedia)

チャレンジャー号ではそれまでも様々なトラブルが起き、打上げ予定が何度も延期されていた。そのためNASAの幹部にはマスコミの注目や国民の期待、予算を握る議会の関心などが心理的な圧力となって重くのしかかっていた。だから何とか早く打ち上げたいと焦る気持ちが技術陣からの警告を無視させ、無理な打上を強行させてしまったのだろう。

その後、内部の調査委員会とは別に議会にも調査

委員会が設置され、詳細な調査が行われた。そして、安全管理の技術面だけでなく、政治的な圧力や個人的な思惑を排除できる組織管理のあり方、客観的かつ段階的にGo/NoGOを判断する標準プロセスの確立などに関する勧告が行われた。その結果、NASAの安全管理は大幅に改善されたのである。

軍用輸送機で負け民間旅客機で成功

ボーイング747(B747)型機は、ジャンボジェットの愛称で知られる4発ワイドボディの大型旅客機である。1962年に初飛行して以来、多くの改良を重ねながら現在も生産が続けられており、安価な大量輸送を実現した画期的な航空機である。



最新型のB747-8型機(写真：Wikipedia)

このB747型機は当初、アメリカ空軍の次期戦略輸送機として設計試作したものであった。しかし受注競争でロッキード社のC5型機(ギャラクシー)に敗れたため、ボーイングはその基本設計を、技術と人員を含め、パンアメリカン航空から要求されていた次期大型旅客機に転用したのである。

空軍の次期戦略輸送機は、C-133型機(カーゴマスター)の後継機として計画されたものであった。要求仕様は、総重量249t(55万ポンド)、積載量81.6t(18万ポンド)、巡航速度マッハ0.75で、胴体

前後に貨物ドアを備えた機体というものであった。航空機メーカー各社に提案が求められ、ロッキード社、ボーイング社、ダグラス社、マーティン社、ジェネラル・ダイナミクス社が設計案を提案した。操縦席は貨物室の上部に配置し、主翼は後退翼を採用、尾翼は後部ドアからの貨物搭載作業を考慮してT型とした点などは各社共通であった。それらの設計案の中からロッキード社、ボーイング社、ダグラス社の案が選ばれて次の選考に進み、最終的にロッキード社案が採用された。この選定には、C141型機の製造が終了して遊休化していたロッキード社の工場を有効利用するという名目で政治的な圧力があつたとする見方もある。いずれにしても、ボーイング社は多額の先行投資をした受注競争に負けたのである。

なお、C-5型機の初飛行は1968年2月で、1985年以降の改良型と区別するため当初のものをC-5A、改良型をC-5Bと呼んでいる。先に開発されたC-141型機(スターリフター)は貨物室が狭く搭載制限があつたため、C-5型機には広い貨物室が求められ、米軍の全ての装甲戦闘車両を運ぶことができた。また、戦車を2台も搭載することが可能であつた。



C-5A ギャラクシー (写真: Wikipedia)

一方、パンアメリカン航空は乗客数150～200人のDC-8型機やB707型機の後継機として、乗客数350～400人の旅客機を求めていた。ボーイング社は空軍の輸送機でロッキードのC5型機に敗れたため、それまでの先行投資を民間旅客機に転用することにし、B747型機が開発されたのである。40年後の今になって振り返ってみると、空軍の輸送機としては競争に負けたボーイング社がその設計を民間旅客機に流用したB747型機が、改良型を含めて1500機以上のロングセラーになったのだから、この方が結果的に良かったのではないだろうか。また、貨物型のB747-Fでは機首部分から直接大きな貨物を積込むことができるようになっているが、これは空軍輸送機としての設計を踏襲したことによるメリットであろう。一方、空軍輸送機の受注競争に勝ったロッキード社はその後、民間旅客機からは撤退した。正に「禍福はあざなえる縄のごとし」である。

接着力不足を逆手に取りポストイットに

ポストイット(Post-it)というのは、アメリカの化学メーカー3M社が開発した剥がしやすい糊を利用した付箋用の紙片である。今では世界中で使われており、コンピューター上で同様の役目を果たす付箋機能のアプリケーションもあるほどである。

ところがこの製品に使われている弱い接着剤は、失敗の産物なのである。1969年に強力な接着剤を開発していた3M社の研究員、スペンサー・シルバー(Spencer Ferguson Silver)が間違つて非常に接着力の弱い接着剤を作ってしまったのである。普通の会社なら失敗の事実を隠ぺいしたり、失敗作を記録と一緒に捨ててしまったりするが、3M社はせっかくなってきたものだから何か使い道はないか、と検

討した。そんな弱い接着剤の使い道はなかなか見つからなかったが、同社の研究員アーサー・フライ (Arthur Fry) が読みかけの本の「栞 (しおり)」に応用できないかと思いついた。このエピソードは、偶然から大発明を生んだ事例として有名である。

ポストイットの商品化は1977年で、当初はなかなか売れなかったが、ある大企業の秘書課に配られた試供品が好評だったことがきっかけで、1980年には全米に販売されるようになり、今では100カ国以上で販売されるようになっているという。

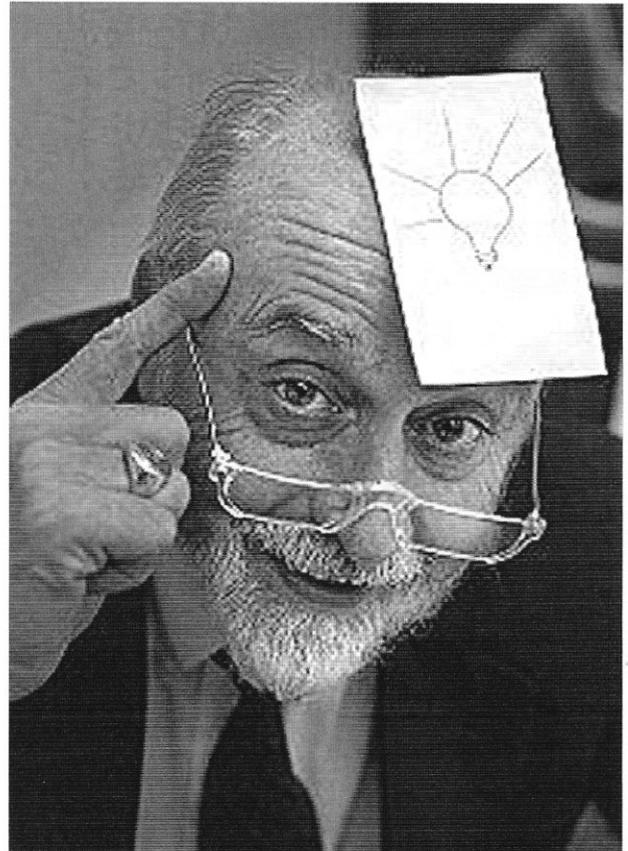
なお、図書館では蔵書にポストイットを使用するのを禁止しているということである。剥がすときに紙の表面を剥ぎとってしまうおそれがあること、紙面に残った糊がカビや虫食い、シミの原因になる恐れがあるからである。

蛇足だが、独創的な製品を次々に生み出すことで有名な3M社には、従業員が勤務時間の15%を本来の仕事とは無関係の活動に充てることを許すという「15%ルール」がある。効率向上のためわずかな無駄も極限まで削る企業が多い中で、非常にユニークな戦略である。さすが「世界を変える技術革新 (Innovative Technology for a Changing World)」を標榜する会社である。

どんどん失敗してどんどん成長する

業界上位の大手コンビニの社長が、今年の入社式の挨拶で新入社員にこんな檄を飛ばした。「みなさんにはどんどんチャレンジし、たくさん失敗し、それによってどんどん成長して欲しい」と。

「犬も歩けば棒に当たる」というのが「江戸いろはがるた」の最初に出てくる「い」の句だが、今では街を歩けばコンビニ (convenience store) に当た



ポストイットを額に貼ったアーサーフライ氏
(写真: Wikipedia)

るほどに増えた。主要チェーンだけで全国に4万店以上もあるのである。

経済産業省の商業統計における業態分類では、コンビニとは飲食料品を扱い、売り場面積が30～250㎡、営業時間が1日14時間以上のセルフサービス販売店とされている。鉄道系を除けば多くはフランチャイズ・チェーン (FC) 方式で、独立経営は少ない。当初は市街地中心だったが、最近では郊外にも多数出店しているだけでなく、病院や学校、官公庁などの公共施設内にも出店している。元々はアメリカが発祥の業態だが、今や日本はコンビニ先進国となり、アジア諸国への進出も盛んである。

つまりコンビニ業界というのは大変な激戦区なのである。いつも知恵を絞って次々に新商品を開発し

ている。各種のおにぎりに始まり、おでんや、チキンフライ、季節商品などで凌ぎを削っている。最近では野菜類を扱う店も増えている。また、FAXやコピー、銀行ATM、宅配便の受託、税金や公共料金の納入、イベントチケット販売などの新しいサービスも次々に取りこんでいる。

FC本部は常に新しいことにチャレンジし、他社との差別化を図る必要があるのである。旧態依然で同じことを続けていればたちまち加盟店の売上が落ち、そうなればFCから離れてしまう。だからコンビニ業界では安全第一という訳にはいかないし、やってみないとわからないことも少なくない。失敗経験がないと人材は育たないのだから、「どんどん失敗しなさい」そして「どんどん成長して欲しい」という社長挨拶になる訳である。現状維持のマンネリは競争に敗退し、衰退を招くからである。

昔から失敗やリスクに関することわざはたくさんあるが、失敗しないよう慎重にというものよりも、失敗してもあきらめずやり直せ、何かを得たいならリスクは覚悟しないと、というものが多いうように思う。以下に思いつくままに列挙してみよう。

「石橋をたたいて渡る」

「転ばぬ先の杖」

「失敗は成功の母」

「七転び八起き」

「転んでもタダで起きるな」

「禍(わざわい) 転じて福となす」

「誤りを改むるに、はばかりることなかれ」

「虎穴に入らずんば、虎児を得ず」

ある経営者は「私は失敗したことがない」と豪語している。そんなことはあり得ないと思ってよくよく聞いてみると、「私は成功するまで諦めず努力を続ける。だから失敗したことはない」という意味だそう。そういうことなら納得できるが、実際には事前によく調べ、よく考えて緻密な計画を立てて実行しているに違いない。それでも失敗は避けられないだろうが、成功にかなり近い失敗で、普通の人にはなかなかできないことなのだろうと思う。多くの場合、問題は失敗をおそれて最初の一步を踏み出さないことなのだから……。

今回は連載の最終回として、「下手な鉄砲も数撃てば当たる」ので失敗に積極的に挑戦しようという趣旨で、次のテーマを予定している。

<4回目> 失敗を恐れず挑戦しよう

(続く)